亜熱帯の涙

桐山襲

亜熱帯の涙

桐山襲

河出書房新社

亜熱帯の涙

昭和六十三年一月十五日　初版印刷
昭和六十三年一月二十五日　初版発行

著　者　桐山　襲

装　幀　高麗隆彦

発行者　清水　勝

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷　大日本印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

©1988　Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-00493-8

亜熱帯の涙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

子供たちよ
よく憶えておくがよい
あの島では
人間がひとり残らず死に果てた
そのことは
三度繰り返されるだろう

第一部

比嘉ガジラーチンは、五十歳の妻の産んだ赤ん坊を膝の上に抱きながら、ずっと昔、自分たちが二人きりでこの島へやって来たときのサバニ（小船）の揺れを想い起こしていた。

……七ヶ月続いている日照りから逃れるために、比嘉ガジラーチンは恋人のウパーヤといっしょにサバニを漕ぎ続けていた。ひどい暑さだった。まるで大洋の中心のような青いうねりが、小さな白い帆と四本のオールしかもたないサバニを揺らした。幾重にも続いている群青のうねりに呑み込まれないように、間違っても横波を受けないように、二人は懸命にオールを握り続

けていた。
サバニの中には、彼らが新しい島で生活を開始するための、ありとあらゆる物が積み込まれていた。大きな黒い鍋があり、古い包丁があった。十本のローソクがあり、火打石があった。海底に棲むオレンジ色の魚を突き刺すための鋭い銛、シャコ貝の口をこじあけるための金具、釣針、網、一滴の水もはいっていない水筒、皺だらけになったパパイヤ、ハンモックと毛布、幾つかの食器とウパーヤの下着、それから、遙か水平線をみつめながら臨月の苦しみに耐えている一頭の黒豚が、二人の恋人の間の狭い場所に身を縮めていた。
そのとき、比嘉ガジラーチンは二十歳であり、ウパーヤはまだ十八歳だった。いや、彼らの歳などは問題ではない。何よりも喉が渇いていた。海原の全体を呑み干してしまいたいと思ったくらいだった。
――実際、それは有史以来の日照りだった。
正月から丸ふた月というもの、空は息をするのを止めたように晴れ続いていた。黒く干上がった夜空に星が異様なまでに輝いていた。それでも、まだその頃は、誰もそれが永い日照りの始まりだとは考えていなかった。しかし、さらにひと月のあいだ冬の晴天が続き、三月の末になっても新しい雨が降ってこないことが分かると、人びとは不安そうに天を仰いで雲を捜し始めた。大人たちは村でいちばん高い場所に集まった。老婆たちは一本の古い木に向かって祈り、老人たちは干からびた喉から大声を出して雲を呼び集めようとした。比嘉ガジラーチンは、そ

して多くの若者たちは、そのような大人たちを軽蔑していた。（いくら大声を出しても雨など降るはずはない）と、彼らは言った。そしてその言葉が天に届いたかのように、灼けている鏡のような空にはひとかけらの雲も現れてはこなかった。

四月、ブーゲンビリアの花は蕾のうちに地上に落下し、鳥たちは恋の唄を忘れて沈黙した。雲は相変らず現れなかった。余りにも永く雲の姿を見なかったために、誰もが夢の中でさえ雲の姿を見ることが出来なくなっていた。

しかし、それはまだ日照りの始まりにすぎなかった。いつもの年ならば完全な雨期にはいる時分になっても雲は現れなかった。そして、その上――破滅的なことであるが――村の井戸が涸れた。このときから、日照りは本当に絶望的なものとなった。まず最初に動物たちが倒れた。ウパーヤの家の水牛が全身の泥をかさかさにして倒れ、ヤモリは薄い紙のような姿となって天井から落ちてきた。豚たちは夜中に集団で狂い、その中の幾匹かは小鳥のような金切声をあげて死んだ。その声は余りにも悲惨なものであったために、それを耳にした幾匹かの気の弱い山羊が、夜の断崖から次々と海に身を投げたほどだった。――人間たちは水分を求めて木の根を掘り、村じゅうのパパイヤというパパイヤを奪いあった。そして手近な果実を喰い尽してしまうと、まだ誰も見たことのない黄金の果実をもとめて、ジャングルの奥へと分け入って行った。ジャングルの中は到る処で大きな樹木が倒れ、夥しい葉が落葉の迷路を作りあげていた。それは亜熱帯樹の黄色い腐乱地帯だった。人びとは一週間に亙って黄色い迷路をさまよった末、痩

せて繊維だけになったバナナの肉、完全に空洞になっているパパイヤの実、虫たちがすっかり喰い荒してしまったオレンジの残骸だけしか手にすることが出来なかった。

六月、村には死人の数が増えた。太陽は相変らず照り続けていた。それでも、さすがに夏になったせいで、空には純白の綿雲が浮かんだ。どれもがたっぷりと水分を含んだ上等の綿雲だった。老人たちばかりでなく、いまでは若者たちまでが、大声を出して近くの雲を呼び寄せようとした。けれども純白の太った天使たちは、どれも村の上に来るちょっとだけ手前で——或いは村の上を完全に通り過ぎてから——信じられないほど大量のスコールを降らせて行き過ぎて行った。すぐ近くの海が灰色のスコールに包まれているのを見るたびに、人びとは雨の匂いで鼻孔をいっぱいにしながら、自分たちの途方もない不運を嘆いた。豪華なシャワーを降らせる雲は一日のうちに幾つも通り過ぎたから、人びとは通り過ぎた雲の数だけ、自分たちの不運を嘆かなければならなかった。いや、老人たちは既に嘆く力さえ失なっていた。ただ若者たちだけが、激しい呪いの言葉を天に向かって吐き続けた。

七月、太陽はいっそう大きさを増して輝き続けた。大地はすべての水分を失なって疱瘡を病んだようにまくれ上がり、到る処に深い亀裂が生まれた。まくれ上がった大地の皮膚の裏側には、夥しい蟬の幼虫の死骸が堆積していた。それは灼熱の蟬の墓場だった。人びとはそれを見て、まるで自分たちの近い未来を覗き見たように口を閉ざした。このまま事態が進めば、秋の雨期が来ないうちに、村じゅうの生き物という生き物は死に絶えてしまうのにちがいなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

だから、比嘉ガジラーチンは、生き残ってゆくための最後の手段として、村の誰にも話すことなく、恋人のウパーヤと共に、その島へ向けて秘密の船出を計画したのだった。

その〈島〉には涸れることのない〈青い泉〉があるという話を、比嘉ガジラーチンは死んだ祖母から聞かされていた。いや、比嘉ガジラーチンばかりではない。この時期、村の若者たちの誰もが、子供の頃に聞かされた〈青い泉〉の話を思い出していた。溢れ出る泉のイメージは、ひとりひとりの渇ききった喉と胸のあたりで迸るほどに広がり、誰もが〈泉〉という言葉を口にする寸前のような同じ口の形をして、ガジュマルの木蔭に渇ききった体を横たえていた。

しかし、若者たちはまだその島を見たことがなかった。ただの一度も見たことがなかった。というのは、その島を見るためには、彼らはまだ少しばかり若すぎたからだった。ただ年寄りだけが、村のはずれにある丘の上から、南南東の方角に島を見ることが出来た。村の人間は誰も、歳を取ってくると、遙かな水平線上に島を見ることが出来るようになるのだった。南南東の水平線に、透明な滴りのように浮かんでいる、薄みどり色の小さな島——。だから村では「島が見えるようになった」ということは、自分がもう死んでもよい歳になったということの表現だった。本当に死が近づいてくれば、島はいっそう鮮明に見えるようになった。何年か前に百五十歳で死んだ老人などは、三本の大きな椰子の木が風にゆっくりと揺れているのが見えると言っていたほどだった。島の北側には荒れた断崖があって、その上で三本の椰子の木が風にゆっくりと揺れている……。

こうして若者たちは、まだ見たことのない〈島〉を空想した。幾つもの乾いた夢の中でのみ、〈島〉は彼らの前に姿を現わした。夢の中では人間は自由だったから、幾人かの幸運な若者たちが、到る処から水滴をたらしたジャングルの中をさまよい、青く輝いている泉の水に口をつけることが出来た。

けれども、若者たちはその島のことを話題にしようとはしなかった。〈島〉という言葉さえ口にしようとはしなかった。なぜならば、その島はかつて人間の死に絶えた島——すべての人間の死に絶えた余りにも不吉な島であることを、彼らの誰もが知っていたからだった。勿論、その話がいつの頃のことであるかは、はっきりとしていなかった。本当の出来事であるのか、或いは単なる空想の物語であるのかということさえ、定かではなかった。ただ、村の人間たちは誰も、何代にも亙って、祖母の口から聞かされた不吉な島の物語を信じ続けてきたのだった。

だから、もしも比嘉ガジラーチンが、自分ひとりきりであったとしたら、彼はその島へ向けて出発しようなどとは思わなかったのにちがいない。——大きなガジュマルの樹の上で月が青いメダルのように輝いていた或る晩、比嘉ガジラーチンとウパーヤは、互いの肩を抱きあいながら、乾燥しきった唇を合わせた。……静かな夜だった。そしてウパーヤのひび割れた口から、薄い紙をすりあわせるほどの微かな音で、「島」という言葉が聞こえた瞬間、比嘉ガジラーチンの胸の中では、恋人に対する欲望と水分に対する欲望とが交錯して、何が何だか分からなくなってしまったのだった。

その〈島〉について、〈青い泉〉について、彼らは夜毎語りあった。接吻の数よりも、秘密の言葉の数の方が多いくらいだった。不吉な、しかし希望にみちた言葉を語る恋人たちを、小さなヤモリだけが見下ろしていた。

そして彼らが出航したのは、七月の最後の日の夜明けだった。乾きすぎた空気が夜明けまでもひび割れさせて、あちらこちらに紫色の裂け目をつくっていた。サバニはゆっくりと岸を離れた。飲むことの出来ない大量の潮水だけが、世界の果へと漕ぎ進んで行く二人の恋人たちを包み込んでいた。

——どれくらい時が過ぎたか分からなかった。七つの太陽が天球の全体を灼きつかせていた。余りにも光が強すぎるせいで、もしくは眼球までが乾ききってしまったせいで、空の全体が蒼黒く見えた。幾匹ものトビウオが海の面を渡った。それは青い夏の精霊のようでもあり、死の世界からの小さな使者のようでもあった。光の舞い散る海原は、余りにも果てしない墓場に似ていた……。

二人はオールを持つ手を休めて水平線をみつめた。島影はどこにも見えなかった。水平線には眩い光の破片が散乱しているばかりだった。光が余りにも強すぎるために、すべての音と、すべての風さえもが死に絶えていた。この広々とした沈黙の風景、風さえもが死に絶えている灼熱の世界は、恋人たちをほとんど絶望的な気分にさせた。まるで幾世紀も前の大洋へ出てし

まったようだと、彼らは思った。
暑さと、そして疲れのせいで、二人はしばらく目を閉じていた。閉じた目蓋の裏側を、時間だけが流れ過ぎていった。それが一時間であるのか、幾十時間であるのかは、誰にも分からなかった。
「島が見えてきたわ！」
ウパーヤの叫び声が聞こえたのは、比嘉ガジラーチンが少し微睡（まどろ）んでいたときだった。微睡みの中の水平線に目をやると、たしかに、薄みどり色の、小さな滴りのようなものが浮かんでいた。それは島のようでもあり、幾度か出会ったことのある遠い夢の世界の風景のようでもあった。
「あなたにも見えるでしょう、比嘉ガジラーチン！　もしも夢でなかったとしたら、きっとわたしたちは、もう五十歳になったんだわ！」
大きなうねりをひとつひとつ越えるたびに、島はだんだんと近づいて来た。薄みどり色の小さな滴りは、しっかりとした緑の点となり、緑の乳房のようなふくらみとなった。北側の荒れた断崖の上には三本の椰子の木が見えた。何もかもが、百五十歳の老人が死ぬ間際に語っていたとおりだった。――やがて風が吹き始めた。風は西から吹いた。いままで何の役にも立たなかった小さな帆が、まるで白い魂を吹き込まれたように力強くサバニを進めた。オールはもはや不用だった。いままで味わったことのない速度に、豚が恋人たちの間で悲鳴をあげた。

やがて午後の積乱雲が急に崩れながら、緑の島の上に翳をつくった。そしてそこから盛大なスコールが島の上に降りそそぐのを見て、二人は海の上で長いこと笑い続けた。余り長いこと笑いすぎたために、時間というものが分からなくなって、まるで自分たちが何週間ものあいだサバニを漕ぎ続けてきたような気分になったくらいだった。二人はもはや自分たちの生まれた村を振り返らなかった。いや、振り返ったとしても、村は既に彼らの視界からは消えていた。だから彼らは、そのころ村の上にとびきり大きな雲が生まれ、そこからやはり盛大なスコールが——まるで七ヶ月分の負債をいっぺんに返済しようとするかのような圧倒的なスコールが——洪水のように村に降り注いでいたことを全く知らなかった。……

「北側の断崖は嶮しすぎる。だから島の南側に船を回そう！」

比嘉ガジラーチンは、ヴェテランの船長のように自信にみちた声で言った。

そしてサバニが島の南側の海に出たのは、太陽がはっきりと西に傾いた頃だった。果てしない南の世界から大いなる海原が打ち寄せてきていた。風は原初の世界から吹き寄せてきていた。それは誰も見たことのない大洋、誰も吹かれたことのない風だった。長いリーフが、一列に白く泡立ちながら、遙かに島を取り囲んでいた。リーフの内側にはメロン色の海が静かに眠り、長い砂浜は純白だった。島は思ったよりずっと大きかった。浜辺からは背の低いジャングルが広がり、遠くに見える北側の断崖へ向かって、緩い傾斜をつくり上げていた。ジャングルの長い斜面を、夕暮に近いオレンジ色の風が吹き下りていた。海にも、浜辺にも、人影はなかった。

いや、それは人間がただの一度も訪れたことのないような、奇妙にしんとした風景だった。

潮の流れが変って、サバニを不安定に揺らし続けた。危険なリーフの間を抜けてゆくために、比嘉ガジラーチンは帆をたたんだ。そして自分の足の上に乗っかっている豚の尻を押しやり、荷物を崩さないように注意しながら、船底から二つの仮面を取り出した。木の仮面は潮に濡れて少し重たく感じられた。それは或るときは一対の死者を意味するものとして、別のときは永遠の生命を意味するものとして、古くから村に伝えられてきたものだったが、比嘉ガジラーチンとウパーヤは、自分たちが新しい島に生命を与えることのしるしとして、二つの仮面を村の倉庫から盗み出してきたのだった。

ウパーヤの後から、比嘉ガジラーチンは黒い仮面をつけてやった。ウパーヤは何も言わなかった。比嘉ガジラーチンも何も喋らなかった。黒い仮面をつけた者は絶対に言葉を口にしてはいけない——それが村に伝えられた掟だった。

二人は再び漕ぎ始めた。リーフの切れ目をくぐり抜けると、それまで濃い青だった海の水は急に透明になった。白く浅い海の底に、さまざまな海藻や色とりどりの海鼠(ナマコ)がゆらめいていた。夕風が静かにサバニを送り、ほんのわずかな力でサバニは進んだ。砂浜の真中には人間のような形をした黒い石が立っていたから、二人はそれを目じるしにして船を進めた。千年のあいだ立ち続けている孤独な石の力にみちびかれるようにして、無人の島の力にみちびかれるようにして、サバニはゆっくりと進んで行った。……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.